総合文化研究所

（様式１）

平成２３年度

研　究　助　成　報　告　書

提出日　平成23年３月２９日

研 究 の 種 類

共同研究（含む海外）　・〇個人研究　・　出版助成

研 究 課 題 名

生活と地殻を結ぶ試み―生活環境形成過程の研究―

研 究 代 表 者及び研 究 分 担 者（所属・職名・氏名）

生活科学科・教授・岡田悟

研 究 期 間（当該年度期間に何時何処でどんな事をしたか、年間スケジュールを記入）

〈例：７月２５日　共立博物館において〇〇の資料収集)〉

５月７～11 日　熊本県立図書館、山鹿市立博物館（熊本県)、久住町教育委員会（大分県）にて山林経営に関する資料調査

８月２、３、５日　収集資料の分類と整理（共立にて）

９月 26 日　国会図書館にて地殻に関する資料調査

11 月８～９日　秩父市大滝（埼玉県）にて山間居住に関する現地調査

11 月 16 日　足尾鉱山資料館（栃木県）にて地殻に関する資料調査

12 月 20 日　国会図書館にて山間居住に関する資料調査

12 月 21～22 日　飯田市立中央図書館（長野県）にて山間居住に関する資料調査

２月８、10、13 日　収集資料の分類と整理（共立にて）

２月 21～24 日　熊本県立図書館、熊本大学附属図書館にて山間居住に関する資料調査

（様式２）

研 究 組 織　　［ 氏名，所属，役割分担 ］
（共同研究のみ記入）
研究発表（印刷中も含む）　雑誌及び図書
なし

」

（様式３）

研究実績の概要

１．はじめに：本研究に至る迄の経過

以前から急傾斜地の集落に注目し、そこでの生活空間、生活環境を対象に研究を進めてきた[1～3]。その理由として、現在の生活を理解し、さらには、将来の生活像を見通し、新たな生活論を構築するのに必要な生活原形といったものを知り得るヒントがこの研究にある可能性が見出されるからである。同時に、これら集落は北関東から中部、近畿、四国、九州の山間地に点々と存在し、しかも、写真では見分けがつかない程に集落景観が類似し、生活空間、生活環境にも共通点が多いことを、研究を進めながら実感していた。こうした類似性、共通性の原因は何かを考えていた時、これら集落が地学で言う中央構造線上に位置していることに気付いた。しかし、中央構造線とその上での暮らしがどのように結び付くのか、納得のいく説明は得られなかった。

２．「地すべり」の発見：急傾斜地に住む理由

以上のようなこれまでの研究経過を基に本研究をスタートさせ、これまでに実地調査をした急傾斜地集落[2]を対象に地質、地殻といった分野での検討を追加し、新たに埼玉県、長野県、高知県での事例を調査した。その結果、中央構造線とその上での暮らしとを結ぶキーワードとして「地すべり」に到達した。中央構造線はその地殻の特徴から、線上に日本有数の地すべり地帯を発生させ、そこが集落立地に適していたのである。なぜ危険な地すべり地帯が集落を作って住むのに適すると言えるのか、その理由は３点挙げられる。

１）我々は急傾斜と思ったが、実は緩傾斜であった

平地での農耕、生活と比較すれば急傾斜という言葉があてはまるが、地すべり地形は急峻な山の一部が崩れ、上部の土砂が崩れた下に溜まって出来たものであり、周囲の山に比べれば緩やかな場所である。

２）肥沃な土地であった

崩れ溜まるというプロセスによって土砂が撹拌され、結果として土が耕されたのと同じ効果を生み、地すべり地帯はどこも肥沃な土地である。

３）水が得られた

地すべりは地下水に地盤が浮き上げられて起こるものであり、地すべり地帯は本来地下水が豊富である。しかも、土砂が撹拌されることにより柔らかい土となり、水が浸み出易くなっている。

３．平地に住む近世、山に住む中世

これら利点の故に、地すべりの危険がありながら人々は地すべり地帯に住んできたのである。しかし、これら利点は周囲の急峻な山岳地形に比べての話であり、平地に住むのに比べればとても利点とは言えない。なぜ平地に住まないのか、と言う疑問が次に生じる。

昔の生活とその景観として、現代人の多くは農業が営まれる農村を想起するであろう。萱葺きの農家があり、前に水田が広がり、後ろに里山が控える、と言った景観である。自然に恵まれた田園生活に見えるが、「自然」を定義通りに「文化」と対比する概念で捉えれば、自然な景観どころか、文化的な景観というのが正しい。その理由として以下の２点が挙げられる。

１）自然のままであれば雨が降れば平地は水浸しとなり水田として使えない。有効な水利システムという文化、文明に裏付けられて初めて水田が成り立つ。

２）自然のままであれば武力のある集団が無防備な平地の集落を襲い、生活が脅かされる。暴力を禁じ治安を維持する文化的な制度が行き渡ることが平地の農村生活を保障する。近世の社会はこの両者を確立させた。江戸時

代初期に各地で行われた新田開発は、雨が降れば水浸しとなった土地に水利工事を施し水田と化したものである。それには幕藩体制の成立が必要であり、その体制によって治安の維持が可能であった。言い換えれば、近世社会成立以前はこの２点が保証されず、自然のままに雨が降れば平地は水浸しとなり、平地の集落は武力のある集団に襲われたことになる。特に後者は戦国時代を含む中世社会のイメージに重なる[5)]。

従って、大雑把に言ってしまえば、中世においては平地に住むことが難しく、山地に住まざるを得ず、山地であれば有利なのは地すべり地帯ということになる。従来は、近代以前のモデルとして農村を対象にした研究が主流で、山地の場合は農村モデルを山という環境に対応させたバリエーションとして論じる傾向があったが、順序は逆で、山での生活がどのように平地に適応されていったかを検討するのが適切な方法であろう。その意味で、急傾斜地集落に生活原形を求めたこれまでの研究視点は有効であったと言えよう。では、中世の山の生活はどのようであったか、とりわけ、水田ではない農業生産手段が必要であったはずであるがそれは何かが問題となる。

４．水田と焼畑

中世の農業生産手段は「焼畑」に代表され、調査した急傾斜地集落ではすべて昭和30年頃まで行われていた。山地という環境では最も適した農法であったと言えよう。近年は「林田」という言葉も用いられるが田ではなく畑であり、水田が１年単位で耕作を行うのに対し、焼畑は数年で１サイクルの耕作を行いその後は自然の山林に還す方法である。近世社会が水田での生産を基礎とし、自立した百姓が検地によって確定された水田の年貢を納めることで成立していたが、焼畑ではこうした方法は不可能で、調査した急傾斜地集落で多く残っていた、名子等の隷属民を従えた土豪的な大規模土地所有が行われていたと考えられる。

以上のように、中世の生産は近世に比べて生産の１サイクルの時間が長く、生産や労働の単位も空間的に広かったことが指摘される。こうした違いは人々の生活観にも影響を与えていたものと予想される。

５．中世から古代へ、日本から世界へ

近世の水田から中世の焼畑へと時代を遡ると、古代ではどのような農業生産手段とそれに基づく社会システムが採られ、古代の生活空間、生活環境はどのようであったか、という疑問に到達する。古代には、当初、班田収授法と言われる国家が土地を個人に与え、年貢を取り、死ねば国家に戻すという方法を採った。近畿地方等に今も見られる条里制がその土地制度を具体的に示している[4)]。その後、これが崩れて荘園制となり、各地に地名としてこの名残が見られる。この古代から中世へはどのように変化したのであろうか。

また、焼畑は日本のみでなく世界に広く見られ、山間の耕地である棚田、あるいは、段々畑といった景観も世界に広く見られ、バリ島では観光ツアーに組み込まれている程である。日本の焼畑、棚田、段々畑と地球上の他の地域のそれとはどのような関係にあるのか。　以上の２点は、本研究で対象とした日本の中世から近世に時間的、空間的に連続したテーマであり、今後考察を深めて行きたい。

注

１）山森芳郎、児玉好信、岡田悟、三枝映子『生活様式・生活意識・生活環境から見た生活原景の変容に関する調査研究』科研費報告書、2008

２）山森芳郎、児玉好信、岡田悟「近代日本における生活原景の変容に関する研究」共立女子大学総合文化研究所紀要第13号、2007

３）山森芳郎、岡田悟「山間集落群の空間特質の変遷について－五木、五家荘、椎葉、一宇、馬路－、共立女子大学総合文化研究所紀要第14号、2008

４）山森芳郎「近江湖東平野における条里空間について－農耕空間の史的形成過程に関する研究(その1)－、日本建築学会計画系論文報告集第429号、1991. 11